

戦間期日本のウクライナ問題理解と  
ウクライナ人組織との接触

岡 部 芳 彦

神戸学院経済学論集

第53巻 第1・2号 抜刷

令和3年9月発行

# 戦間期日本のウクライナ問題理解と ウクライナ人組織との接触

岡 部 芳 彦

## 1 はじめに

戦間期の日本において、ウクライナを取り巻く政治環境やウクライナ独立運動について、どこまで、また、どのように理解されていたのであろうか。<sup>(1)</sup>本稿では、日本の在外公館から発せられた機密公電、そしてそれらを基に外務省でまとめられた種々の報告書などの史料を使って、まず、日本政府や外務省が在外ウクライナ人の独立運動やカルパト・ウクライナ独立について、どの程度把握し、どのように評価していたのかについて分析する。また、各地のウクライナ人組織と日本との接触はどのように行われていたのかについても考察する。具体的には、アメリカやヨーロッパにおける日本の在外公館を中心に日本人とさまざまなウクライナ人組織との接触と、その背景を明らかにしたい。

## 2 日本政府のウクライナ理解

### (1) 「ウクライナ軍事団体」

1930年9月30日、在ポーランド特命全権公使松島肇から外務大臣幣原喜重郎宛に「ウクライナ軍事団体に関する件」と題された機密公電が打たれた。「小波蘭（東部ガリシア）に於ける破壊焼討といった暴挙に従事しつつあるウクラ

---

(1) 日本人とウクライナ人の人的交流については以下を参照。岡部芳彦『日本・ウクライナ交流史1915-1937年』神戸学院大学出版会、2021年。

戦間期日本のウクライナ問題理解とウクライナ人組織との接触

イナ軍事団体はドイツおよび在米ウクライナ移民との関係に関する別添情報ご参考まで報告す」との書き出しで始まっているこの公電は「小波蘭に於けるウクライナ軍事団体」, 「独逸とウ軍体」, 「コノワレツと在米ウクライナ移民」, 「波蘭に於ける行動」の4つの部分で構成されている。<sup>(2)</sup>

ここで取り上げられた「ウクライナ軍事団体」とは1920年にプラハで結成されたウクライナ軍事組織（Українська війська організація, 以下UVO）である。その目的は、地下組織として政治テロやサボタージュを行うことにより、ポーランド政府を動揺させ西ウクライナの独立を獲得しようとするものであり、シモン・ペトリューラとともにシーチ銃隊を組織したイェヴヘン・コノヴァレツィが指導者となった。<sup>(3)</sup>

UVOはドイツの外交政策とウクライナ独立派と密接な関係があるとされ、「小波蘭」（現ポーランド・マウオポルスカ県）において、「郵便自動車強奪」, 「穀山（スキルダ）及び住宅焼討」, 「資金庫襲撃」にくわえて、リヴィウやハリチ付近での鉄橋の破壊を試みるなど「テロル及びサボタージュ盛んに行われ」たことが報告されている。一方、UVOの活動は「市場に対するダイナマイト爆破未遂事件」, 「社会暴動」, 「資金庫襲撃」が中心で、在ポーランド日本大使館は「国際見解からはウクライナ民の反乱とは認められず」と捉えていた。<sup>(4)</sup>

また、在ポーランド日本大使館は、「コノワレツは其の任務に対して2万マルク」をドイツ陸軍から受け取り、「軍事的探偵材料提出」していると記している。また「在伯林ウ軍体代表たる前独逸軍将校ヤリを経てコノワレツに対し政治運動のため10万マルクを給与」されたとも書いており、ウクライナ軍事組織の背後には、ドイツの支援と資金の提供があると見ていた。<sup>(5)</sup>

---

(2) JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B 02030835400, 1. 一般/2 昭和5年9月30日から昭和9年2月27日（A-2-2-0-G/PO1）（外務省外交史料館）第1～7画像。

(3) 黒川祐次『物語 ウクライナの歴史』中公約書, 2002年, 217頁。

(4) JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B 02030835400, 第2～3画像。

(5) 同上, 第2画像。

「ヤリ」とは、リコ（リヒャルト）・ヤリ（1898－1969年）である。ヤリについては、出自もよく分かっておらず、ハンガリーやチェコ系のユダヤ人との説もあり、謎が多い。<sup>(6)</sup> 第一次世界大戦にオーストリア・ハンガリー帝国軍に中尉、上級中尉（大尉）として従軍、その後、西ウクライナ人民共和国の正規軍であるウクライナ・ハリチーナ軍に入隊した。1927年にドイツ、チェコスロバキア、リトアニアで刊行されウクライナでも違法配布されたウクライナ軍事団体の機関紙『スリマ』の編集委員を務め、1928年4月にプラハで開催されたウクライナ民族主義者会合、<sup>(7)</sup> 1929年1月末から2月初旬にウィーンで開催された第1回ウクライナ民族主義者会議にコノヴァレツィらとともに出席しており、UVOの中心人物の一人であった。一方、1930年代以降はドイツ国防軍の情報機関アプヴェーアのヴィルヘルム・カナリス提督とウクライナ民族主義者組織 *Організація Українських Націоналістів* の連絡役を務めた。<sup>(8)</sup> 1938年にコノヴァレツィが暗殺された後は、ステパン・バンデーラを支持した。ドイツ国防軍のウクライナ人部隊「ローランド大隊」の創設にも関与した。<sup>(9)</sup> 独ソ戦後はリヴィウに入り、1941年6月30日にヤロスラフ・ステツコやバンデーラらに

(6) ヤリの評伝については以下が詳しい。Кучерук О. Рико Ярий - загадка ОУН. - Львів: ЛА «Піраміда», 2005.

(7) Мірчук П. Нарис історії Організації Українських Націоналістів. Перший том. 1920-1939. За редакцією С. Ленкавського. Українське видавництво. Мюнхен - Лондон - Нью-Йорк, 1968. - С.86.

(8) Mueller, M., *Nazi Spymaster: The Life and Death of Admiral Wilhelm Canaris*, Skyhorse Publishing, Inc, 2017, pp. 164-167.

(9) Посівнич М. Воєнно-політична діяльність ОУН в 1929-1939 рр. / Ін-т українознавства ім. І. Крип'якевича НАН України, ЦДВР. - Львів, 2010. - С. 40. この時期、ドイツ軍には二つのウクライナ人部隊が作られた。その一つナハティガルト大隊はドイツ軍制服を着用し、ドイツ軍特殊部隊ブランデンブルグ隊の隷下にあったが、ローランド大隊は南方軍の指揮下にあり、「ドイツ国防軍勤務」と書かれた黄色い腕章を巻いたチェコ軍制服と第一次世界大戦時のオーストリア軍のヘルメットを着用していた。両大隊ともにウクライナ国独立宣言後の10月に解散させられた。ローレンス・バタースン著竹田円・北川着訳『ヒトラーの特殊部隊 ブランデンブルク隊』原書房, 2019年, 138～168頁。

## 戦間期日本のウクライナ問題理解とウクライナ人組織との接触

よるウクライナ国家独立宣言で、ルーマニア、スロバキア、クロアチア、ドイツとともにウクライナ国務委員会の日本担当在外代表、つまり、駐日ウクライナ大使に任命された<sup>(10)</sup>。しかし、ウクライナ独立は許されず、ヤリもゲシュタポに分離主義者として拘束された。その後、ウィーンで1943年まで自宅軟禁となった。ヤリの現在の評価は、ウクライナ民族主義者という以外に、ドイツ側のエージェントという解釈もあれば、戦後ソ連占領下のウィーンに住んでいたにもかかわらず逮捕されなかったことからソ連側のエージェントとの見方をされることもある<sup>(11)</sup>。

1930年頃には、日本の外務省は、コノヴァレツィやウクライナ軍事組織が、ヤリを通じてドイツから財政的な支援を受けていることを把握していた。一方、おそらく外務省や日本の在外公館の気付かぬところで、1930年代半ばから日本の駐独武官室は、ヤリを通じてコノヴァレツィと極秘に接触していた<sup>(12)</sup>。日本側のカウンターパートは臼井茂樹（当時中佐）とその後任の馬奈木敬信（当時大佐）であった。彼らは西ベルリンのクーアフェルステンダムとベルリン郊外のファンケルゼーに拠点を置き、6人の白系ロシア人を使って、反ソ宣伝文書の印刷を行った<sup>(13)</sup>。駐独大使となった大島浩以外との日本人との接触を断っていた

---

(10) Гай-Нижник П.П. Відновлення Української Держави Актом 30 червня 1941 р. / Держава у теорії і практиці українського націоналізму.

Матеріали VI Всеукраїнської наукової конференції, Івано-Франківськ, 26 - 27 червня 2015 р. - Івано-Франківськ: Місто НВ, 2015. - С.61.

(11) Каганець І. Ріхард Яри (Рико Ярий) / Документальне дослідження. Народний Оглядач, 12.12.2013. (URL: <https://www.ar25.org/node/23623> 最終閲覧日：2021年4月25日)。

(12) 大島浩「被告尋問調書大島浩」1946年4月22日，極東国際軍事裁判法廷証第776A号，No. 34～35，国会図書館デジタルコレクション。岡部伸『「謀報の神様」と呼ばれた男—連合軍が恐れた情報士官小野寺信の流儀』PHP，2014年，86～87頁。

(13) 「スターリン暗殺計画」を含むコーカサスにおけるベルリン駐在日本武官府の対ソ工作については，田嶋信雄『日本陸軍の対ソ謀略：日独防共協定とユーラシア政策』（吉川弘文館，2017年）の第8章，丸山静雄『還らぬ密偵：対ソ蒙満謀略秘史』（平和書房，1948年）の第6章を参照。

馬奈木が最も力を入れたのはカルパト・ウクライナにおける反ソ集団教育で、その中心となっていたのがコノヴァレツィとヤリであった。<sup>(14)</sup>

在ポーランド日本大使館の報告の「コノワレツと在米ウクライナ移民」の項目でも、UVO とドイツの関係について詳述されている。その蜜月関係は、「ウクライナ独立派と〈コ〉（著者注：コノヴァレツィ）との関係にかなり悪影響を与え」<sup>(15)</sup>ていた。アメリカやカナダには、第一次世界大戦中に「連合軍と共に対独戦に参加した…ウクライナ移民」も多く、親独的なコノヴァレツィに対して「同情を冷却せしめた」のであった。それに対しUVO は、「センニクに広き全権を与えて米国に派遣」<sup>(16)</sup>した。機関紙の『スリマ』も大量に送られ、UVO 側からは「米国より財的援助を受くるに於いてはドイツとの関係断絶すべき旨を約する書簡」が在米ウクライナ移民の有力家族に送られた。一方、この書簡には「ドイツの威力から脱却する為には相当資金を必要とし之が為めには掠奪を行わねばならぬ」とも書かれていた。

これらの記述からは、ドイツのみならず、在米ウクライナ人社会からの資金援助やその影響力の大きさが窺える。次節では、その在米ウクライナ人の活動実態について日本政府がどの程度把握していたのかを見てみたい。

## （2）在米ウクライナ人協会

1938年4月から5月にかけて「在米ウクライナ人団体」より廣田弘毅外相宛に書簡が送られた。内容は4月3日にシラキューズ、同月10日にフィラデル

---

(14) 鈴木健二『駐独大使大島浩』芙蓉書房、1979年、92～93頁。シナン・レヴェント『日本の“中央ユーラシア”政策—トウラン主義運動とイスラーム政策—』彩流社、2019年、212頁。OUNのカルパト・ウクライナでの活動については以下を参照。ПагіряО, Посівнич М. Воєнно-політична діяльність ОУН у Закарпатті (1929—1939)/ Український визвольний рух : наук. зб. — Львів, 2009. — Збірник 13. — С. 45-88.

(15) JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B 02030835400, 第5画像。

(16) 同上, 第5画像。オメリヤン・センニクは、1930年にOUN最高指導部、1939年OUNローマ大会の議長を務めたが1941年ジトミールで暗殺される。

戦間期日本のウクライナ問題理解とウクライナ人組織との接触

フィアのウクライナ国民館 (Ukrainian National Home), 17日にペンシルベニア州ベツレヘムのウクライナ国民館, 27日にニューヨーク州コホーズのウクライナ系アメリカ人クラブ (Ukrainian American Citizen Club), 5月6日にニューヨーク州ローチェスターのウクライナ教会ホールにおいて, それぞれ開催された会合における同じ文面の決議文であった。また5月22日付でオハイオ州クリーブランドのカヤホガ郡ウクライナ民主連盟 (The Ukrainian Democratic League of Cuyahoga County) からほぼ同様の内容の決議文が送付されている。内容はポーランド政府や議会による「ウクライナ人根絶政策」やウクライナ東方カトリック教会に対する攻撃に抗議する内容で, 教皇ピウス11世にも保護を求めると記されていた<sup>(17)</sup>。

#### 決議 (要旨)

在米ウクライナ人は波蘭国領内居住のウクライナ人に対する同国側の迫害に付抗議する目的を以て四月三日シラキュース (四月十日フィラデルフィア) ウクライナ国民館に会合せり

(一) 最近波蘭議会に於て議員はウクライナ民族運動を支持せるウクライナ希臘正教大司教アンドレイ・シェプティスキ<sup>(18)</sup>を猛烈に攻撃し殊に波蘭新聞紙は同大司教並びにウクライナ教会に対する反宣伝を行い居れり

(二) 右宣伝は波蘭政府のウクライナ人根絶政策の明なる証拠なるや 右は波蘭の国際的義務に反するものなり 然るに諸政策はウクライナ人の土地に対する波蘭人の移住, ウクライナ人学校及母語使用に対する圧迫, 多数ウクライナ愛国青年の裁判等に現し居れり

---

(17) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.B 04013198500, 民族問題関係雑件 第三卷 15. 「ウクライナ」人関係 分割1 (I-4-6-0-1\_003) (外務省外交史料館) 第14画像。

(18) アンドレイ・シェプティツキー：ウクライナ東方カトリック教会府主教。

依って左の通 決議す

- (一) 吾人は前記大司教及ウクライナ教会に対する攻撃に付、抗議す
- (二) ウクライナ教会及ウクライナ民族を擁護せんとするウクライナ人及同僧侶の態度を支持する
- (三) 前記波蘭の反ウクライナ政策に対して抗議す
- (四) ウクライナ独立国再建の爲吾人は波蘭、ソ連邦、チェッコ及羅馬尼に居住するウクライナ人の闘争を支持する
- (五) 本年一月十九日、エピファニー祭に波蘭軍隊を参加せしメサリン大司教の行為を愛国的行為と認む
- (六) 法王ピウス11世対しウクライナ教会の保護を求む
- (七) 本決議の送付せらるる国々に対しウクライナ教会及波蘭が圧迫し居れる文化教育機関の保護に付斡旋を懇請す
- (八) 本決議は法王庁書記、波蘭政府、米国國務長官、英、仏、伊、独及日本の外務大臣に送付す

ソ連邦其他ウクライナを占領者に対する決議

ポリシェビキ政府は東部ウクライナを破壊せり、依って決議すること左の如し

- (一) ソ連邦がウクライナ人に加えたる野蛮行為に対し抗議す
- (二) ウクライナの惨状を隠蔽せんとする人民戦線派に対し抗議す
- (三) チェッコ及羅馬尼のウクライナ主義抑圧に対して抗議す

このように在米ウクライナ人からの度重なる接触に対し、在ニューヨーク総領事館は調査研究を行い、1938年7月21日に宇垣一成外務大臣宛に「在米ウクライナ人氏族運動に関する件」<sup>(19)</sup>と題した報告を行った。報告書には「在米ウク

---

(19) JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B 04013198500、民族問題関係雑件 第

戦間期日本のウクライナ問題理解とウクライナ人組織との接触

ライナ人の分布状態及職業」, 「在米ウクライナ人の社会生活」, 「ウクライナ独立運動」, 「親蘇的ウクライナ人団体及び共産系団体」の項目が含まれた。以下では同報告から日本当局が在米ウクライナ人をどのように捉えていたのかを見てみたい。

同報告によれば、ウクライナ人はソ連領内に約3300万人、ポーランドには約400万人から700万人、ルーマニアに約150万人、チェコに60万人、カナダに45万人、アルゼンチン及びブラジルに25万人、極東に75万人、そしてアメリカには75万人から100万人と推計されている。アメリカへの移民は1870年頃より始まり30年間のうちに20万から50万人、米国移民局の統計から1899年から1936年の間には27万人に達し、その内、アメリカの選挙権を有するのは約20万人としている。その3分の1はペンシルベニア州に住んでいた。分布は「職業上の適応性」により決まり、東部のニューヨーク(約5万人)、ボストン、ハートフォード、バッファローといった大都市部を中心に、中部はミルウォーキー、デトロイト、セント・ルイス、ミネアポリス、西部はサンフランシスコ、ロサンゼルスに居住していた。主に鉄鋼業、ガラス工業、ゴム工業、繊維工業、家具製造、自動車工業、カメラ・ラジオ工業に従事したほか、農業労働者や農場経営者も見られた。

「ウクライナ人は一般に極めて勤勉儉約なり」とされ、他民族の言語、宗教、風俗と混交しながらも、正教会と東方カトリックを中心に信仰心に富み、相互扶助団体、文化団体、スポーツ団体を設立し、ウクライナ語新聞の発行を通じて親睦が図られていた。一方、これらの団体では親ソ派と反ソ派の対立があり、それは「帝政時代のロシア内に於ける内訌(著者注:うちわもめ)を其の儘米<sup>(20)</sup>国にもたらされ」と評している。

---

三卷 15. 「ウクライナ」人関係 分割1 (I-4-6-0-1\_003) (外務省外交史料館) 第82~98画像。

(20) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.B04013198500, 民族問題関係雑件 第三卷 15. 「ウクライナ」人関係 分割1 (I-4-6-0-1\_003) (外務省外交史料館) 第39

表1 アメリカのウクライナ系主要団体（在ニューヨーク総領事館調べ）

団体名	概要	役員
Ukrainin National Association	1893年にペンシルベニアで設立。15州で400支部を持つ。相互生命保険業務を行う。会員数約3万人。440万ドルの資産を持つ。Svoboda紙を発行。	会長：Nicholas Muraszko 書記長：Dmitro Halychyn 会計：Roman Slobodian 機関紙編集長：Dr. Luke Myshuha
United Ukrainian Organizations (Obyednania)	1922年設立。上記団体と密接な関係。ウクライナ内の小学校や文化教育施設の援助救済資金を集める。	会長：Emil Revik 書記長：Dr. Luke Myshuha (Svoboda紙編集長)
Organization for the Rebirth of Ukraine (O. D. W. U)	1931年設立。ニューヨークに所在。ウクライナ民族解放運動を目的とする。全米に約100支部、会員数1万人。機関紙 Nationalist を発行。	会長：Prof. Alexander A. Granovsky 副会長：Eugene Skotzko 機関紙 Nationalist 編集主任：V Dushnyk

【出典】JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B04013198500, 民族問題関係雑件 第三巻 15. 「ウクライナ」人関係 分割1 (I-4-6-0-1\_003) (外務省外交史料館) より作成。

表1は、同報告で取り上げられたウクライナ独立運動を行うウクライナ系主要団体である。アメリカにおけるウクライナ系主要団体について、名称、概要、役員に至るまでかなり詳細に調査されていた。それぞれの団体の役員についての記載があるほか、職業情報や住所が付されている場合もあった。また、それらの団体の動向についても詳しく記載されている。例えば Organization for the Rebirth of Ukraine (O. D. W. U) の大会については、次のように書かれている。

最近の全国大会は、1937年7月コネチカット州ニューヘヴンに開催せられ500人之に出席せり。本年は9月3日より5日迄米国及加奈陀に於ける同団体の大会をニュージャージー州ニューアークに於いて開催する赴にして欧州及南

画像。

戦間期日本のウクライナ問題理解とウクライナ人組織との接触

米よりも代表者が列席する赴なり。尚其の際9月5日紐育市に於てウクライナ独立のための示威運動を行う趣なり。本団体の役員は左の通り

Prof. Alexander Granovsky…会長 ミネソタ大学教授にして2101 Sounder Ave., st. Paul, Minn.

V. Cherewatiuk…副会長

Eugene Skotzko…書記長。Ukrainian Press Service 編集主任を兼ね居り且本団体設立当初よりの中堅なり。三十才位

E. Kryven…会計

尚機関紙 Nationalist の編集主任は V. Dushnyk なり<sup>(21)</sup>

在ニューヨーク総領事館はこれらの情報をどのようにして入手していたのであろうか。表2は同報告に登場する在米のウクライナ系の「啓発宣伝機関」についてまとめたものである。同館は、在米のウクライナ系メディアについても、発行頻度や言語に至るまで詳細に把握していた。また同報告には1938年に Enrico Insabato によって記された『ウクライナ：人口と経済』、『ウクライナ・プレス・サービス』紙<sup>(22)</sup> (図1, 2), 『Ukrainian Weekly』紙 (図3), や『Nationalist』紙 (図4) の各号についても添付されており、これらのメディアを通じ

---

(21) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.B 04013198500, 民族問題関係雑件 第三卷 15. 「ウクライナ」人関係 分割1 (I-4-6-0-1\_003) (外務省外交史料館) 第44~45画像。

(22) Українська пресова служба/Ukraine Press Service はもともと、ウクライナ民族主義者組織 (OUN) によって1931年にベルリンにリヒャルト (リコ) ・ヤリを編集人として設立された。ニューヨークのほか、ジュネーブ、ロンドン、パリ、ローマ、プラハ、マドリッド、ブリュッセル、ウィーン、カウナスに支局を置き、連絡を維持していた。1938年にナショナリスト・プレス・サービスに改名され、第二次世界大戦の勃発後、ローマに移され、1943年まで存続した (Canadian Institute of Ukrainian Studies. URL: <http://www.encyclopediaofukraine.com/display.asp?linkpath=pages%5CU%5CK%5CUkrainianPressService.htm> 最終閲覧日: 2021年4月8日)。

表2 ウクライナ系「啓発宣伝機関」（在ニューヨーク総領事館調べ）

メディア名	概要
Ukrainian Press Service	月2回「ニュース・リリース」を発行。全米の新聞社、各国大使館に無料送付。O.D.W.Uの Skotzko が責任者。
America	週3回、ロサンゼルスで発行。
Narodne Slovo (“National Word”)	週刊、ピッツバーグで発行。
Sitch Call	ニューアークで発行。英・ウクライナ語。
Nash Stiah (“Our Banner”)	シカゴで発行。ウクライナ語。
Ukrainian Gazette	デトロイトで発行。ウクライナ語。
Dnipro	月2回、ロサンゼルスで発行。Ukrainian Autocephalous Orthodox の教会機関紙。
Nova Zkittia (“New Life”)	月2回、オリファント（ペンシルベニア州）で発行。Concord Benevolent Association の機関紙。
Hromada	月2回、デトロイトで発行。
Visty Z Ohio (“News from Ohio”)	月2回、クリーブランドで発行。
Ukrainsky Vistnyk (“Ukrainian Herald”)	月刊、カーテレット（ニュージャージー州）で発行。ウクライナ正教会の機関誌。
Missionary	月刊、ロサンゼルスで発行。カトリック教会の機関紙。
Boyevi Zharty	月刊、ニューヨークで発行。

【出典】JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B 04013198500, 民族問題関係雑件 第三巻 15. 「ウクライナ」人関係 分割1 (I-4-6-0-1\_003) (外務省外交史料館) 第45～47画像より作成。

て、在米ウクライナ人の動向の把握に努めていたと考えられる。くわえて同報告では「親蘇的ウクライナ人団体及共産系団体」についても、調査している（表3）。これらの団体は「親蘇、独立運動に反対にして機関紙を発行し独立派と対立<sup>(23)</sup>」していた。

このように日本の在米公館は、ウクライナ系メディアや刊行物を使って、ウクライナの独立運動を行っていた主要団体だけではなく、親ソ的なウクライナ人団体についてまで、かなり詳細な報告を本省に打電していた。それではヨ

(23) JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B 04013198500, 第48画像。

戦間期日本のウクライナ問題理解とウクライナ人組織との接触

表3 「親蘇的ウクライナ人団体及び共産系団体」(在ニューヨーク総領事館調べ)

団体名	概要
The Sojedeninije	ペンシルベニア州ホームステッドが本部。会員数3万3千人。資産780万ドル。ウクライナ語週刊紙『Amerikansky Russky Vestnik』, 英語の週刊紙『American Russian Falcon』を発行
The Sobranie	ペンシルベニア州マッキーズポートが本部。会員数1万4千人。資産65万ドル。ウクライナ語の週刊紙『Prosvita』を発行。
Russian Brotherhood Organization of the United States	ロサンゼルスが本部。会員数1万7千人。資産150万ドル。
Russian Brotherhood Society	ペンシルベニア州ウィルクスバリが本部。会員数7600人, 資産80万ドル。
Lemko	ニューヨーク市所在。小規模

【出典】JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.B 04013198500, 民族問題関係雑件 第三巻 15. 「ウクライナ」人関係 分割1 (I-4-6-0-1\_003) (外務省外交史料館) 第47~48画像より作成。

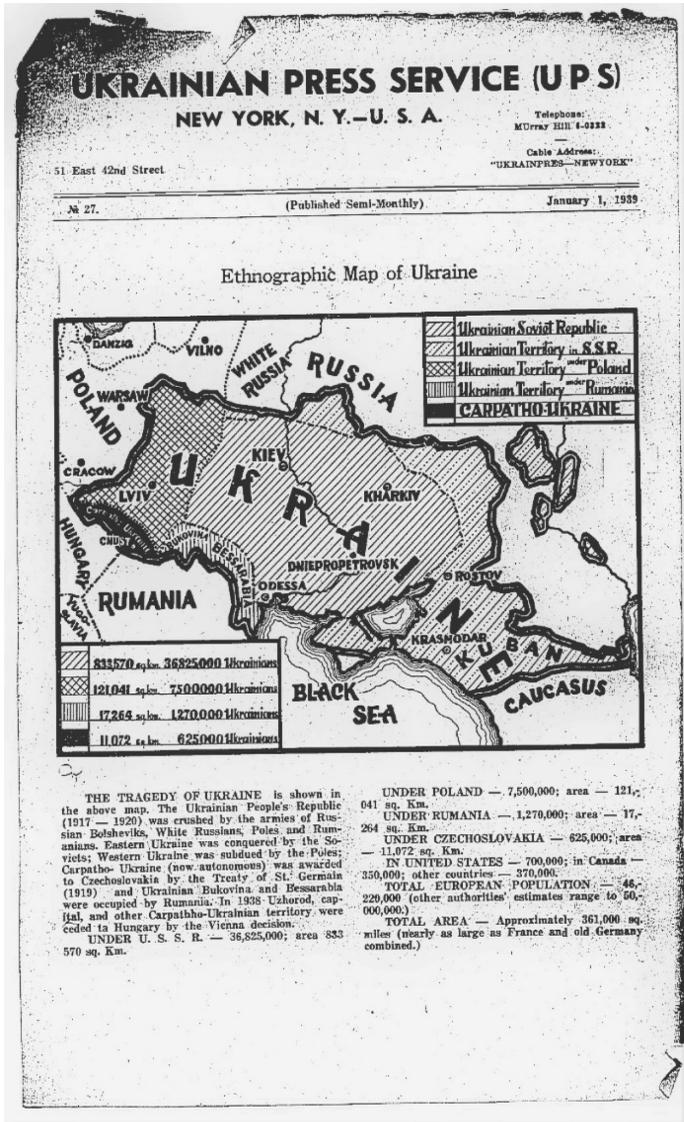
ロッパに所在した日本の在外公館はウクライナ問題についてどのように見ていたのだろうか。次節では、カルパト・ウクライナ問題を中心にそれを見てみたい。

### (3) カルパト・ウクライナ問題

1938年9月のミュンヘン会談の結果、ドイツがチェコ領ズデーテンを併合したことをきっかけに、チェコ=スロバキアは連邦国家となった。スロバキアとともに、現在のザカルパッチャ州にあたる「カルパト・ウクライナ」は自治を認められるようになった。ウクライナ語が政府、学校での使用言語となり、「カルパチア・シーチ」という独自の軍隊も作られた。翌1939年3月15日、フスト市で独立を宣言したが、数時間でハンガリーに占領され、その支配下に入った。<sup>(24)</sup>本節では、在欧の日本の公館から外務省に送られた報告を基に、日本

(24) 黒川『物語 ウクライナの歴史』220~221頁。

図1 『Ukraine Press Service (UPS)』紙 (1939年1月1日号)



【出典】JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.B 04013198600, 民族問題関係雑件 第三巻 15. 「ウクライナ」人関係 分割 2 (I-4-6-0-1\_003) (外務省外交史料館) 第29画像。

図2 『Ukraine Press Service (UPS)』紙 (1939年1月15日号)

**UKRAINIAN PRESS SERVICE (UPS)**  
NEW YORK, N. Y. — U. S. A.

Telephone:  
Murray Hill 6-9322

Cable Address:  
"UKRAINFRES—NEWYORK"

51 East 42nd Street

No. 28. Published Semi-Monthly January 15, 1939.

**COLONEL ANDREY MELNYK**  
New Head of Organization of Ukrainian Nationalists



THE ASPIRATIONS OF 50 MILLION UKRAINIANS for an independent Ukraine in East Europe center today on Colonel Andrey Melnyk, new head of the Organization of Ukrainian Nationalists. He was appointed by the "Provid" (Chief Council) of the OUN to succeed the late Colonel Evhen Konovaletz, who was assassinated in Rotterdam last May 23 by an OGPU agent.

A brilliant commander in the Ukrainian Revolution (1917-1920) Col. Melnyk is regarded by the Ukrainian people as their chief hope of liberation. Forty-eight years old, he has devoted his life to the Ukrainian struggle and stands today as leader of the years-long movement to unite Ukraine, now parceled out among Russia, Poland, Rumania, Czechoslovakia and Hungary.

A University graduate, Col. Melnyk volunteered for service in the Ukrainian "Sitchovi Striltsi" (Sharpshooters) division of the Austrian Army at the outbreak of the World War. He was captured by the Russians at Lysonia in October, 1918, escaped to Kiev the following year and with Col.

Konovaletz, Col. Roman Sushko and other prominent military leaders helped organize the "Sitchovi Striltsi" as the defenders of the newly proclaimed Ukrainian People's Republic.

For three years Melnyk participated in the bitter fighting which raged almost continuously as the young state fought on four fronts against Bolsheviks, White Russians, Poles and Rumanians. Crushed in the winter of 1919-1920, the Ukrainian Army was dispersed and its leaders were forced to go into exile. Col. Konovaletz and Col. Melnyk returned to Western Ukraine (annexed by Poland) and formed the Ukrainian Military Organization. For his activities, Polish authorities imprisoned Melnyk for four years (1924-1928). Upon his release he became administrator under the Ukrainian Metropolitan Andrey Sheptytsky.

When Col. Konovaletz was killed last spring, Col. Melnyk became acting head of the OUN. He stands ready today to lead the Ukrainian Army of Liberation when Ukraine fights again for freedom.

【出典】JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.B04013198600, 民族問題関係雑件第三巻 15. 「ウクライナ」人関係 分割2 (I-4-6-0-1\_003) (外務省外交史料館) 第15画像。

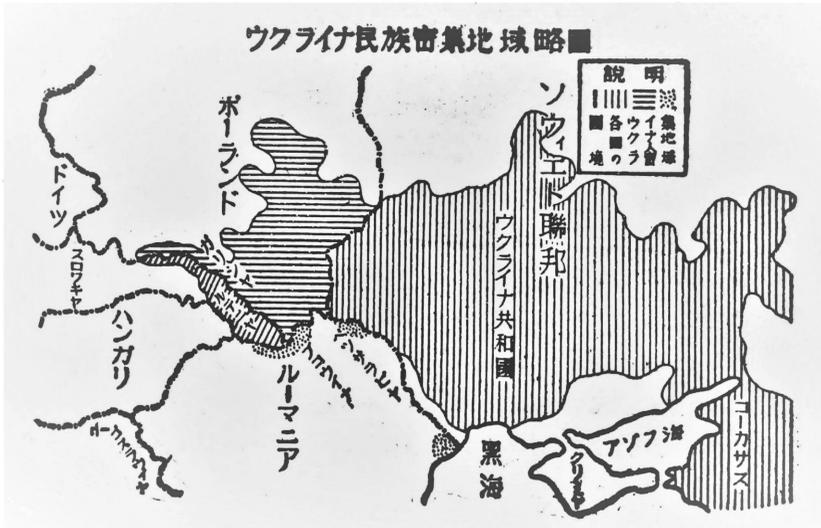
図3 『Ukrainian Weekly』紙 (1938年7月9日号)



【出典】JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.B04013198500, 民族間関係雑件 第三巻 15, 「ウクラナ」関係 分割1 (I-4-6-0-1\_003) (外務省外交史料館) 第74画像。



図5 「ウクライナ民族密集地域略図」



【出典】外務省情報部編『昭和14年版国際事情：世界の動き』1938年，190頁。「ルテニア」と書かれた周辺がカルパト・ウクライナ領域にほぼ相当。カルパト・ウクライナの位置については図1も参照。

の外務当局がどのようにカルパト・ウクライナ問題を理解していたのかを見てみたい。

カルパト・ウクライナが独立宣言を行う前後から、日本の外交当局によって、その問題は意識されていた。1938年末、在モスクワ日本大使館の片岡長冬書記生が、フストを調査のため訪れたが、後年、そのときの印象を次のとおり振り返っている。

世界のジャーナリスト界をにぎわしているような危機は何処にあるやと目を見張ったが、所謂軍事的らしい状態もなければ、これを指導し、扇動するドイツ人勢力なるものもない。市街は至って平穏であった。

カルパト・ウクライナの土着住民をルシン人（ルテヌ人）と称するが、彼

戦間期日本のウクライナ問題理解とウクライナ人組織との接触

らは果たして、ウクライナ人か、或はロシア人であるのか、正しく理解するのに困った。

現地の智識階級や、外来勢力中には、ロシア派とウクライナ派とがあって、相争っていることを知ったのである。

土着のルシン人一般は無智で政治的関心が薄いので、白系ロシア人や、ウクライナ民族主義者が、これを自分の政治目的の爲に利用しているのであった。<sup>(25)</sup>

一方、1938年12月16日に「カルパト・ウクライナ及ソブオフ（レンベルグ）地方を旅行せる片岡書記生の報告要旨御参考迄」と題され東郷茂徳駐ソ大使より有田八郎外務大臣宛に打たれた極秘電では、現地の様子が以下のように報告されている。

カルパト・ウクライナに於ては従来ウクライナ民族国家建設を主張するウクライナ派と大露西亜併合を主張する露西亜派と相抗争し来れるか現在ウクライナ派絶対優勢にして露西亜派は洪牙利占領地に移れり 国境方面に於いては波蘭、洪牙利よりのテロリスト侵入することあるも首府フスト初め一般に平穩なり<sup>(26)</sup>

---

(25) 片岡長冬「カルパット・ウクライナの思い出」『ソ連研究』第3号、1954年、5頁。また片岡はフスト訪問前後の1938年11月に「ウクライナ問題」と題して、ウクライナの歴史、文化、当時の政治情勢に至るまでを記した詳細な報告書を作成している。JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B 10070237300、「ウクライナ」問題／対蘇政策参考資料 第三輯／1938年（在外\_60）（外務省外交史料館）。

(26) JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B 02031171400、4. ハンガリー対チェッコ関係／2 昭和13年10月20日から昭和15年5月1日（A-4-1-0-5\_1\_003）（外務省外交史料館）第21画像。

また片岡は、自治政府の大臣と短時間立ち話をし、カルパト・ウクライナの「前途は洋々たるものがあるとお世辞を述べた<sup>(27)</sup>」。そのことが外国メディアや同盟通信社によって報道されたことから、ポーランドに対して「多大な不安をなげかけ日本は痛くもない腹を探られた形」であるとともに「日本もウクライナ工作に一枚加わるだろうという政治的トリックに、又日独離間の巧妙なる手に利用された傾きがある」と内閣情報部に評されている<sup>(28)</sup>。

1938年12月27日、在ウィーン総領事山路章から有田外務大臣宛に「諜報第十七報送付の件」と題された機密電が打たれた。副題は「カルパト・ウクライナ問題」である。在ワルシャワならびに在ブカレストの至國（著者注：チェコスロバキア）公使館からチェコスロバキア外務省に宛てられた報告や同外務省から在英公使宛に送られた6通の公電（ドイツ語）の原本と翻訳が含まれている。在ワルシャワ・チェコスロヴァキア公使館が本国外務省に宛てた公電によれば、ミュンヘン会談後の、カルパト・ウクライナについてのポーランドの反応は以下のようなものであった。

波蘭はカルパート・ロシア居住のウクライナ人が既に合併反対を表明し居ること、波蘭内のウクライナ人が既に合併反対を表明し居ること、波蘭内のウクライナ人も自治を要求し居ること並びに右自治運動は独逸側より大に援助を受け居ること等を詳知し居るものなるを持って、至領カルパート・ロシアの洪国への併合を洪国唯一の対外重要問題と為さんとし居れり。波蘭政府は独逸政府が波洪共同国境作成に不賛成なるのみならず却てウクライナの自治乃至独立を圍り居ることを勿論承知し居れり。

つまりドイツ側がウクライナ独立運動を支援しているとの見方であった。同

---

(27) 片岡「カルパット・ウクライナの思い出」6頁。

(28) JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.A 03024390200, 「ルテニア問題と反日宣伝」（国立公文書館）第1, 2画像。

戦間期日本のウクライナ問題理解とウクライナ人組織との接触

時期のポーランド国内のウクライナ人の活動も活発化していた。

兎に角最近、ウクライナ独立と洪牙利反対を示威する在波蘭ウクライナ人の活動極めて活発なるものあり。

ウクライナ人の政党代表者は、致国カルパート・ウクライナに認めたる自治は総てのウクライナ人が実現せんと努力し居るカルパート・ウクライナ共和国の基礎となる可く又斯の如くして全ウクライナ人が統一的独立国家を形成し得るべきことを確信し居れり。<sup>(29)</sup>

活発化するウクライナ人の活動については、1939年2月16日在チェコスロバキア国特命全権公使藤井啓之助から有田外務大臣ならびに在ソ、独、仏の大使宛に「カルパト・ウクライナに於ける反共協会設立の件」と題された電文が打たれた。「フストに於て発行せらるる唯一のウクライナ語新聞」であった『ノヴァ・スヴォボダ』紙の1939年2月14日号のコピーも添付されている<sup>(30)</sup>（図6）。同紙はカルパト・ウクライナの政治組織ウクライナ国民連合（Українське національне об'єднання: УНО）の機関紙であるため、同号の記事の大半は、2月12日に実施されたカルパト・ウクライナ議会（Сойм Карпатської України: СКУ）でУНОが90%以上の支持を得て大勝を取めたことについてであった。一方、在チェコスロバキア日本公使館の公電にはそれらについては全く記載がなく、以下のとおり、カルパト・ウクライナの首都フストで「反共協会設立」についてのみであった。

---

(29) JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B 02031171500, 5. カルパトウクライナ問題（A-4-1-0-5\_1\_003）（外務省外交史料館）「波蘭に於けるウクライナ運動に關する件」（10月13日附ワルソー来信）第7～8画像。

(30) 公電では「3月14日」と誤記。

図6 『ノヴァ・スヴォボダ』紙 (1939年2月14日号)

Річник XL. Число 32.

Хуст, вівторок, 14 лютого 1939.

50 с.

# НОВА СВОБОДА

ОРГАН УКРАЇНСЬКОГО НАЦІОНАЛЬНОГО ОБ'ЄДНАННЯ

## СОЛОДКИЙ МІЙ НАРОДЕ!

Вас з першим виставля голосуванням бачив і ширі прома Твоїх добрих до то великої Нації, з котрої Ти походив. З великою утратою, з немовним радістю бачиш, що Ти маєш варту і собі свободу, що Ти не є ніщо тям покращивши раба, тям покращивши руганин, нарівні тебе можна з привертати українським чужим людям що Ти є спиною великої Нації святого Володаря Великого і Ярослава Мудрого, що були першими основоположниками нашої Рідної культури і мови Твої, між тегорічній великій нації народі славно були від того.

Твоєю ширіюювати при виборках до першого українського парламенту Твоє полюблену вільність, демократію, що Ти змінив у собі вистаріли не лиш тільки національну самобільність, але і солідарність ширіюювати одні до одного, братів до братів, порозумівши великі спільні інтереси.

В наші виборки великою успішні і бачу йому громади твої, що наша країна, доки наша, від нас спільною місією розселила, є на міжнародному полі заставила і що жинуться за всі великі міжнародні спори. Твоєю має наша країна основоположення і її чинити велика будучи.

Я в наші виборки Твоїх носили до Твоєї першого союзу, мому Твої, добрий мій народко, полюбити, що ми привертати всі наші сили для збудування заперого полюбленого, го-

подарського та культурного устрою нашої країни. Твої з нашою українською білі і зміниє всесвітню, між-

ривне великого національного боротьбою і найважливішим українським зміниє есенціями багатого, лю-

догого народу і для своїх братів, що жинуть пона кордонима Рідної Землі.



З рідною нашою тут привертати нашу співвітчизників з великою національною гордістю, з відданістю, чеснотами і рідничем, які кандидатів на великі спільні діла і своїх заступників, з тямом на ту літерату і голосування. З привертати конституцію тямом і те, що надерсима національною змінистю в демократію після з лівою. Тямом, якою національною літерату і на-примовувати відрік і для їх заступників, але є останній зміни — певною ліній на великі національні діла — відступити від того, але при виборках, разом і з жидівською виселенням нашої країни.

першочислий рідничий літерату і не оскутати в національній тямом українського успішні, лише 90% від го-мосла. Любо з любові, ширіють за ширіють.

Особливо уміти ми не те, що наша літерату була привертати і на те дороге і цінно для, щоб відбудувати культуру, господарську і політичну самобільність для блага нашого народу, у згоді з великою славолюбивою братською честию і спільною з спільною федерацій.

Др. Августин Волошин.

Юліан Ревал:

## ВЕЛИКА САТИСФАКЦІЯ

Виборки до Першого українського союзу відзначили досить успішно! Карпатський український народ доказав перед світом свій національний самобільність, до міжнародного державного життя!

Дослідивши далі, що не зробили більше самі себе, не стале захищати своїм ділом Велику нашу мову, що ми хочемо чинити в розумно розбудувати свою державу, зобов'язали в свій спільно згоді жинуться полюблені.

Завдяки чинити українського народу не тільки наш союзу, закарпатським братів, які в Європі, які

за осявеню. На не може бути гордію полюбні правом ідею українська національна самобільність на між успішні лінійній ліній із поміж між виборки найкраще ми твердо знаємо перед усім державним та їх вироками, що українською поступу народом української мови, що варті своїм представити нашо з нашої союзу на між національній чинити.

Я переконаний, що і тих останніх 6 громади (із стот), котрі приїхали виборки не тільки разом з тямом міжнародним 94-ми, які не чинити міжнародні виборки, ширіювати, що

полюбні, бо були ідеями народом тямом пропангандило і лише тоді вистаріли ширіювати до себе та до своїх будучи.

Великі виборки! Не підірвали національну для мене спільно! Націоналізм на успішні, але тільки спільно переміг на спільно!

Виборки до Першого українського союзу праві не спільно! Народ стосовношав нашо до свого Україну та до полюбленого ширіювати УІЮ народко до добра народу. Бо не

добри не тільки споможу нас усіх, але великою самобільністю, ділом ідеями спільно, що тільки українці винуваті безупинно та без утрат. Мусимо ужити всі перемогли, що ступити на дороги до української держави, до ширіювати українського народу. Я вірю разом з тямом 94%-ами громади і громадами, що не нам уміти!

Віртемося Українці високою відданістю і домі! Піднесемо його не лише на ширіювати нашого народу та на радість наших ширіювати!

【出典】JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.B04012985300, 各国ニ於ケル反共産主義運動関係雑件 第三巻 32, 「カルパトウクライナ」ニ於ケル反共協会設立関係 (I-4-5-1-3\_003) (外務省外交史料館) 第4画像。

戦間期日本のウクライナ問題理解とウクライナ人組織との接触

本会合に於て共產主義と戦へたるペトリューラ及コノワーレツを追想して一分間黙禱を為せり

正面にはウクライナ、独逸、日本、伊太利及西班牙の国旗を掲げウクライナ国歌を合唱して閉会せり<sup>(31)</sup>

カルパト・ウクライナの反共協会は、その設立総会において、日本国旗を正面に掲げていたのである。『ノヴァ・スヴォボーダ』紙の記事を基にした公電では、その反共協会（Товариства Боротьби з Комунізмом）設立総会の模様は以下のものであった。

一九三九年二月九日の発会式には約二百人参加し独逸人の来客もあり発起人としてヒミネツ氏開会し成立に至る点の経過を述べ更にカルパト・ウクライナ政府がマルクス主義に依れる吾人の適党を形式的に一掃したるに過ぎざるに鑑み本協会を設立してウクライナ人の敵を徹底的に一掃せんとするものなりと述べたり

本協会委員会には左の諸氏を選任せられたり

会長 ユ、ペレウーズニック

副会長 エム、ドリナヤ

書記 ユ、ヒミネツ

会計係 イ、コベルリオス

宣伝係 ウェ、クジミク

監督委員会員 イ、イ、ネリツィク

技師 ウエ、チャブル

---

(31) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.B 04012985300, 各国ニ於ケル反共產主義運動関係雑件 第三卷 32. 「カルパトウクライナ」ニ於ケル反共協会設立関係 (I-4-5-1-3\_003) (外務省外交史料館) 第3画像。

同協会の発起人「ヒミネツ」とは、ユリヤン・ヒミネツのことである。ヒミネツは1911年生まれで、1932年末にカルパト・ウクライナ地域の OUN の幹部となった。1938年10月から1939年3月にかけて、ヒミネツはカルパト・ウクライナ共和国大統領アウグスト・ヴォロシンの指示で西欧諸国のカルパト・ウクライナに対する情報を収集した。カルパト・ウクライナ独立直後にハンガリーが同地を占領のため、1939年3月29日にウィーンに脱出した。戦後はアメリカに移住し、1984年に回想録『私が見たカルパト・ウクライナ』を記した。1991年にウジホロドを訪れ52年ぶりにウクライナ帰国を果たし、1994年に没<sup>(32)</sup>した。

ヒミネツはカルパト・ウクライナの外交部代表としてベルリンの日本大使館とも接触していた。その回想録によれば、1938年10月、妻マリアとともにカルパチア・シーチ参謀長のミハイロ・コロジンシキー大佐と会うためにベルリンを訪れた。コロジンシキーの紹介で、日本大使館を訪れ「日本軍の将官」と面会し、カルパト・ウクライナ建国の大義を説明し支援を求め、同地の視察を提案した。ヒミネツによれば、1938年12月15日、日本軍の将官、リコ・ヤリ、ヒミネツ、マリアは、車でベルリンからウィーンなどを経由しフストを訪問した。<sup>(33)</sup>

(32) Закарпаття онлайн, Від Підкарпатської Русі до незалежної Української держави. До 100-річчя народження Юліана Химинця (URL: <https://zakarpattya.net.ua/News/85216-Vid-Pidkarpatskoi-Rusi-do-nezalezhnoi-Ukrainskoi-derzhavy.-Do-100-richchia-narodzhenia-Iuliana-KHymyntsia> 最終閲覧日：2021年4月10日)。

(33) この日本軍将官が誰を指すのか、ヒミネツの回顧録には名前の記載がなく、また管見のかぎり日本側の史料にも記述がないため、現在のところ不明である。大島浩が1938年10月の駐独大使就任までは駐独武官であったが、大使就任後のフストへの極秘訪問は考えにくく、また本人も東京裁判のソ連側尋問で、「白系露人」との個人的交流はなかったと述べている（「被告尋問調書」1946年4月22日、極東国際軍事裁判法廷証第776A号、No. 35、国会図書館デジタルコレクション）。ただし、大島自身は1939年1月1日のカナリス提督主催の晩餐会で、パウロ・スコロパツィキーと接触したとも語っている（田嶋信雄「ナチ時代の駐独日本大使館一人と政策―」『成城法学』48号、1995年、410頁）。大島の後任の河辺虎四郎（当時陸軍少将）も着任したのは同年12月1日であり、10月にヒミネツに会うのは不可能である

戦間期日本のウクライナ問題理解とウクライナ人組織との接触

1939年2月9日の反共協会設立と同日には東京に向けて、会長のペレウズニックとヒミネツの連名で以下のメッセージが英文で打電された（図7）。

日本国首相閣下 東京

フストの反共協会設立にあたり、ボルシェビズムとの闘いの中で我々の必要な友人である日本国に最上の好意をお送りします。

ペレウズニック ヒミネツ

それに対して、1938年2月15日在チェコスロバキア日本公使館より以下の返電が打たれるとともに、返電内容が有田外務大臣に報告されている。<sup>(34)</sup>

ペレウズニック ヒミネツ フスト

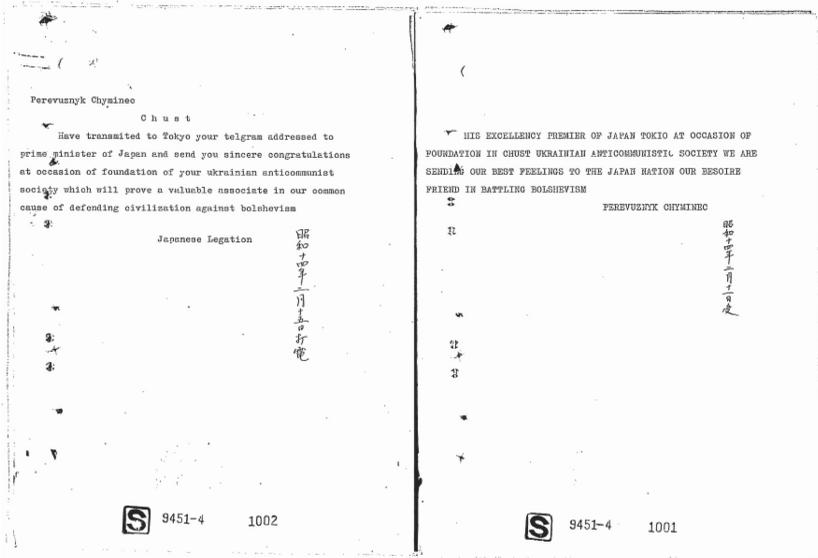
日本国首相宛の貴殿の電信は東京に転送され、ボルシェビズムに対する文明を守るための共通の目的において、価値ある組織と認められる貴ウクライナ反

---

とともに着任直後にフストに行くのも不自然である（「宣誓供述書/河邊虎四郎」, 1948年1月23日, 極東国際軍事裁判法廷証第3886号, 1頁, 国立国会図書館デジタルコレクション）。また、河辺の回想録にも、ウクライナ側との接触については記載がない（河辺虎四郎『河辺虎四郎回想録』毎日新聞社, 1979年）。将官ということであれば、もう一つの可能性は笠原幸雄（当時少将）である。笠原は、日独伊同盟案を携えて参謀本部とベルリンの陸軍武官事務所を結ぶ連絡として日独を往復しており、10月にはベルリンにいた。ただ11月には帰国し、12月に五相会議に出席したと証言しているため、時期が合わない（「宣誓供述書/笠原幸雄」1947年10月23日, 極東国際軍事裁判法廷証第3618号, 1頁, 国立国会図書館デジタルコレクション）。後年に書かれたウクライナ民族主義者組織のフリホリー・クペツィキーの回顧録では、将官昇進を果たした日本軍人を、その当時の階級ではなく「将軍」と書かれていることもある。そう考えると、ドイツで白系ロシア人を組織し、駐独日本大使館からも知られることなく単独行動を行っていた馬奈木敬信（当時大佐, 最終階級中將）の可能性もある。

(34) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.B 04012983100, 各国ニ於ケル反共産主義運動関係雑件 第三卷 10, 反共産主義資料関係 分割 2 (I-4-5-1-3\_003) (外務省外交史料館) 第3画像。

図7 反共協会の電信と在チェコスロバキア日本公使館の返信



【出典】JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B 04012983100, 各国ニ於ケル反共産主義運動関係雑件 第三巻 10. 反共産主義資料関係 分割2 (I-4-5-1-3\_003) (外務省外交史料館) 第3画像。

共協会の設立に心からの祝意を送ります。

日本公使館

### 3 むすび

本稿では、日本の在外公館から発せられた公電などから、ウクライナ軍事団体、在米ウクライナ人の動向、カルパト・ウクライナ問題を日本側がどのように把握したのかを分析した。また世界中のさまざまなウクライナ人組織から日本側へどのような接触があったのかも見てきた。

そこからは、世界の各地で発行されていたウクライナ・メディアの情報を駆使して、日本の在外公館から本国外務省に送られた情報がかなり詳細かつ多岐にわたることが分かった。ポーランド領内でのUVOの活動だけではなく、そ

戦間期日本のウクライナ問題理解とウクライナ人組織との接触

れを財政的に支援する在米ウクライナ人組織の詳細、そしてカルパト・ウクライナ独立問題についてなど、日本の外務省がウクライナ内外のウクライナ人の動向について注意を払っていたのである。

一方、ウクライナ人側は、在米ウクライナ人の各組織から日本の外務大臣宛の多数の書簡が送付されたほか、カルパト・ウクライナの首都フストにおける反共協会設立総会においては、正面にドイツ、イタリア、スペイン、ウクライナとともに日本の国旗が掲げられていた。そこからは、同協会の設立目的の一つが、防共協定（共産「インターナショナル」ニ対スル協定）へのカルパト・ウクライナの加盟促進であったことが窺える。<sup>(35)</sup>日本側からも在モスクワ大使館関係者の視察があったほか、日本軍関係者が極秘裏にフストを訪問した可能性があるなど、カルパト・ウクライナ独立問題について高い関心を持っていたことが窺える。

フストの反共協会設立発起人であったヒミネツが駐独日本大使館の駐在武官と会談したほかにも、カルパト・ウクライナ高官と日本の外交官が接触することもあった。1939年3月2日にジュネーブの柳井恒夫局長代理兼総領事から発信された公電によれば、カルパト・ウクライナ共和国大統領のアウギュスト・ヴォロシンとウクライナ国民（人民）共和国亡命政府首相であったヴァチェスラフ・プロコポヴィチが揃って柳井を訪ね、ウクライナ情勢について意見交換をしている。<sup>(36)</sup>ヨーロッパやアメリカのさまざまなウクライナ人組織が、独立運動に対する日本の支援を期待していたのである。

同じころ、スイスのジュネーブの地において、ウクライナ国民（人民）共和国関係者とある日本人との間で、もう一つの日宇の接触が行われようとした。そこでは、ウクライナ独立運動に対する方向性と具体的な支援策が話し合われ

---

(35) これについては先行研究でも指摘されている。Пагіря О, Посівнич М. Воєнно-політична діяльність ОУН у Закарпатті (1929-1939) / Український визвольний рух. - Львів, 2009. - 36. 13. - С. 71,

(36) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.B02032158800, 「ウクライナ」関係 (A-6-5-0-1\_12) (外務省外交史料館) 第14, 15画像。

た。次の論考ではそれについて詳しく見てみたい。

## **Japanese Understanding of Ukrainian Problems and Contacts with Ukrainian Organisations in the Interwar Period**

**Yoshihiko Okabe**

### **Abstract**

This article analyses how Japan understood the developments of Ukrainian military organisations, Ukrainians in the US, and the Carpatho-Ukrainian problem through official telegrams issued by Japanese diplomatic missions abroad. The article also examines which contacts were made with the Japanese side by various Ukrainian organisations around the world.

We found that the information sent to the Ministry of Foreign Affairs by the Japanese diplomatic missions abroad was quite detailed and varied, using information from the Ukrainian media published in various parts of the world. This information included not only the activities of the UVO on Polish territory but also, inter alia, the details of Ukrainian organisations in the US which financially support it and the question of the independence of Carpatho-Ukraine. The Japanese Foreign Ministry paid attention to the developments of Ukrainians in Ukraine and abroad.

Meanwhile, on the Ukrainian side, numerous letters were sent by Ukrainian organisations in the US to the Japanese Minister of Foreign Affairs, and at the general meeting of the Anti-Communist Association in Khust, the capital of Carpatho-Ukraine, the flag of Japan, along with the flags of Germany, Italy, Spain and Ukraine, was displayed in front of the stage. It appears that one of the aims of the Association was to promote the accession of Carpatho-Ukraine to the Anti-Comintern Pact. The Japanese side was interested in the issue of the independence of Carpatho-Ukraine, as there was a visit of the Japanese diplomat to Moscow, and there was a possibility that Japanese military officials visited Khust in

secret.

In addition to the meeting of Julian Khiminets, the founder of the Anti-Communist Association in Khust, with the Charge d'Affaires of the Japanese Embassy in Germany, there were contacts between senior officials of the Carpatho-Ukrainian Republic and Japanese diplomats. On 2 March 1939, an official cable sent by Tsuneo Yanai, Deputy Director General and Consul General in Geneva, indicated that Avgustyn Voloshyn, President of the Carpatho-Ukrainian Republic, together with Vyacheslav Konstantin Prokopovych, Prime Minister of the Government-in-Exile of the Ukrainian National Republic, visited Yanai and exchanged views on the situation in Ukraine. Various Ukrainian organisations in Europe and America were hoping for Japanese support for the Ukrainian independence movement.

**Keywords:** Ukrainian diaspora, Carpatho-Ukraine, Ukrainian Military Organization (UVO), Japan-Ukraine relationship.

---

Yoshihiko Okabe, Ph.D., Professor, Faculty of Economics, Kobe Gakuin University.

President, Japanese Association of Ukrainian Studies.

okabe@eb.kobegakuin.ac.jp